

# 日本語とシンハラ語の授受表現の対照研究

— 学 習 者 の 誤 用 に 着 目 し て —

R. M. Sandhya PRIYADARSHANI

## 1.はじめに

日本語とシンハラ語は文法、語順、発音などが非常に良く似ているため、スリランカでは日本語が学びやすい言語の一つとして盛んになっている。しかし、日本語と非常に似ている言語にもかかわらず日本語とシンハラ語の対照研究や、習得研究がいまだに少ないのは現実である。最近になって日本語とシンハラ語の授受表現の習得研究 (Priyadarshani 2008) や対照研究 (宮岸 2009) などがなされるようになったが、シンハラ語の授受表現の全てが明らかにされているとは言えない。そこで、本論では、先行研究を踏まえたうえで、日本語とシンハラ語の授受表現をシンハラ語話者の学習者の誤用文に着目し、検討することを試みる。

## 2.研究の課題と目的

日本語学習者は中級になって、基本的な文法規則を習った後でも、次のような不自然な表現がよく見られる。

- i. 誰かが私の財布を取りました。
- ii. 母が私に小包を送りました。
- iii. 川上先生が日本語を教えました。

これらの表現が不自然な理由として、話者の立場が見えず、視点を表わす表現が脱落していることがあげられる。非用の現象はさまざまな面に見られるが、談話の展開に関係関係深いものとして授受表現の非用を取り上げられる。適切な場面で適切な表現が使いこなせない原因には、習熟の程度の問題もあるが学習者の母語と関係が深く、母語に同様な表現がない場合こうした現象が起こりやすいことが観察される。

水谷(1984)は「誰かが私の財布を取りました」という文は各関係を明らかにするための例文として成り立つかもしれないが、話し言葉では、事実関係正確さとともに、話し手の事実に対する態度の表わし方の妥当性も要求されるので発話として正しくないと述べている。

大塚(1995)は、「母が私に小包を送りました」が客観的過ぎて不自然な表現であり、母の

行為が話し手と関係なく、離れたところでなされている感じがすると述べている。そして、堀口（1983）が授受表現の習得は日本語学習者にとって必ずと言ってよいほどぶつかる困難の一つとして挙げられている。形式が分かっている、どのような場面でもどう使えばいいかが分からない学習者は、授受表現が必要なところでは使わず、必要ではないところで使用してしまい、誤解や摩擦を生じる場合も少なくないと言われている（堀口 1983、荒巻 2003 他）。

ところで、シンハラ語は文法・語順・発音などが非常に良く似ているため、スリランカ人学習者にとって日本語は学びやすい言語の一つだという意見もある。しかし、韓国語や、中国語などの言語と比べ、シンハラ語に関しては日本語との対照研究も習得研究もまだ数が少なく、両言語の類似点や相違点が十分に明らかにされていないのは現実である。Priyadarshani (2008)はスリランカ人シンハラ語話者の日本語学習者 71 名を対象に文産出テストと選択肢テストの 2 種類の調査方法を用いて授受表現の習得研究を行った。しかし、分析方法では授受本動詞と補助動詞を別々に分析されたため授受本動詞と補助動詞の関連については説明が足りなかった。

そこで、本稿では、Priyadarshani (2008) で使用した文産出テストのデーターをさらに分析し、それらの結果を学習者の会話データーであるインタビューデーターと比較することで両言語の授受表現の意味用法を検討する。そして、スリランカ人日本語学習者の誤用文に着目し、シンハラ語と日本語の授受表現の意味用法を対照比較することを試みる。

### 3.日本語のシンハラ語の授受表現の意味用法

日本語の授受表現には、「アゲル」「クレル」「モラウ」という 3 系があり、それらの敬語表現である「さしあげる」「クダサル」「イタダク」と、自分より目下に対しての「ヤル」との 7 つの動詞が用いられる。また、各動詞に対し補助動詞もある。日本語学習者にとって習得しにくい項目だと話題になされている授受表現に対する研究が数多くなされているが、その大部分が「視点」という面に注目している研究である（宮地(1965)、久野(1978)、奥津(1979,1986)、大江(1975)）。

一方、シンハラ語の授受表現には日本語と同じく、“denawa” “gannawa” “labenawa” という 3 つの授受本動詞が用いられる。シンハラ語の授受表現には話者の視点に関係ないため、日本語のように「ウチ」と「外」の区別がないが日本語と同じく、恩恵を表わすことがある。シンハラ語でも授受補助動詞用法があり、日本語の「～テモラウ」とシンハラ語の“-wa/gannawa” は使役表現を和らげる表現であるため両言語の間に緊密な関係があると言える。

しかし、シンハラ語の授受本動詞として、“denawa” “gannawa” “laēbenawa” と三つの表現が用いられるが、それらは、日本語の「アゲル」と「モラウ」に対応する表現であり、日本語の「クレル」に対応する表現はない。そして授受補助動詞用法には“-la/denawa”、

“-wa/gannawa”と2つの表現があるが、これらは「~テアゲル」「~テモラウ」の意味であり、日本語の「~テクレル」に対応する表現がない、そのために、シンハラ語学習者は、会話や作文で「クレル」を「アゲル」か「モラウ」と混同してしまい、しばしば間違った文を作り出すことがある。また、シンハラ語では不規則動詞に対しては授受補助動詞が使用できない、という相違点もある。

表 1 日本語と英語・韓国語・中国語・シンハラ語の授受表現

日本語	英語	韓国語	中国語	シンハラ語
アゲル	give	juda	gei	denawa
クレル				
モラウ	receive	patta	dedao	læbenawa
				gannawa
~テアゲル	×	e/juda	geita	·la/denawa
~テクレル	×			
~テモラウ	×	×	×	·wa/gannawa

(Priyadarshani2008:22)

では、実際の場面で授受表現を使用しているスリランカ人日本語学習者が両言語の授受表現をどう理解しているのか。両言語の授受表現の類似点や相違点が学習者にどのような影響を及ぼしているのかを検討するために次のように調査を行った。調査方法は以下の通りである。

#### 4. 調査方法

##### ① 絵を使用した文産出テスト(日本語学習者と日本語母語話者を対象にした)。

対象者:学習者と日本語母語話者

内容: 授受本動詞においては各表現に2問ずつ入れた。授受補助動詞においては、各項目に2問ずつ6問、また、授受表現を使用しない場面「ゼロ」の問題を2問入れた。授受本動詞の場合、各項目に2問ずつ入れた。問いには場面が絵と文章で示された<sup>1</sup>。場面の正確な理解を図るために各問題にはシンハラ語の翻訳を付けた。授受表現のテストであることを意識できないように全ての説明文において授受表現の使用を避けた。

## 5. 調査の実施方法

日本語母語話者に対しては、個別に調査資料①を渡し、回答を収集した。調査に日本語母語話者を対象とした目的は、母語話者の回答を正答の判断基準とするためである。日本語学習者に対しては、授業中に筆者また、担当の教師が、先ず、資料①を配布、回収後に SPOT を行い、その一週間後にインタビューを行うという順番で実施した。このような形式で調査を行った理由は、出来るだけこの調査は授受表現の調査であるという意識を学習者に 与えないためである。

### 5.1 得点化と分析方法

本研究での正用と誤用の判定に関しては、適切な場面で授受表現「アゲル」「クレル」「モラウ」「～テアゲル」「～テクレル」「～テモラウ」を使用しているものを正答とし、それ以外のものを全てを誤用とした。

### 5.2 調査資料

絵を使用した文産出テストの対象者はスリランカの大学にて履修科目の一つ<sup>2</sup>として日本語を選択している 1 年生、2 年生、3 年生のシンハラ語話者の学習者 71 名である。学習者の日本語能力を SPOT<sup>3</sup>で測定し、3 つのレベルに分けた。被験者の 71 名を SPOT の成績により 10-30 点 23 名は下位群、31-44 点 28 名は中位群、45-65 点の 20 名は、上位群と 3 グループに分けた。正答率は、各グループの被験者一人一人の成績の平均値を計算して得られた。特に、年齢と性別を問わずに調査を行ったが全員 20 代前半で、女性 69 名と男性 2 名であった。次に、その学習者の中から日本語能力試験 2 級以上を合格している学習者 10 名を選び、ロールプレーを行った。

授受補助動詞に関する問題について詳しく述べると、問題 1 と 3 は「～テクレル」に関する問題で、第 3 者が自分のためにある行為をしてくれたという場面である。詳しく述べると、問題 1 は、話し手 A は、友達の中田さんが引越しのとき「手伝ってくれた」ことを B と話す場面で、問題 3 は、話し手 A は、クラスメートの中田さんが自分の恋人の写真を「見せてくれた」事を B と話す場面である。

「～テモラウ」に関する問題の場合、問題 2 は、試験日筆箱を忘れてきた A は、友達の木村さんにペンを「貸してもらった」ことを B に話す場面である。問題 4 は日本人の友達に手紙を書いた A は漢字が出来なくて中田さんに住所「を書いてもらった」ことを B に話す場面である。

問題 5 と 6 は授受表現が必要ではない「ゼロ」場面で目上の聞き手のために自分がある行為をすると申し出る場面である。詳しく述べると、問題 5 は、話し手 A は聞き手 B(先輩)に対し「荷物の半分を持ちまじょうか」と申し出る場面で、問題 6 は、話し手 A は聞き手 B(先生)に対し「私が道を案内します」と申し出る場面である。

「～テアゲル」に関する問題の場合、問題 7 は、先日雨の中で中田さんがどう帰ったか

「～テアゲル」に関する問題の場合、問題 7 は、先日雨の中で田中さんがどう帰ったかとたずねる B に対し、A が自分の傘を「貸してあげた」ことを話す場面である。問題 8 は、A は、友達の木村さんに桜大学の電話番号を「教えてあげた」ことを B と話す場面である。

5.3 文産出テストの結果

調査①である文産出テストの結果を検討してみると、授受本動詞の場合、下位群においては、「アゲル」「クレル」「モラウ」の中「アゲル」の正答率が一番高かった。「モラウ」と「クレル」の場合、正答率に差が見られなかった。中位群と上位群においては、「アゲル」「クレル」「モラウ」の中「モラウ」の正答率が一番高かった。そして、「クレル」の方が正答率は「アゲル」と「モラウ」より低かった。

また、スリランカ人シンハラ語話者場合、「～テアゲル」「～テクレル」「～テモラウ」の授受補助動詞はレベルが上がるにつれ習得が進むといえる。しかし、レベルが向上しても「～テクレル」の正答率が「～テアゲル」と「～テモラウ」よりも低いことで、スリランカ人学習者にとって「～テクレル」の習得が一番難しい項目であるといえる。スリランカ人シンハラ語話者の日本語学習者の授受本動詞と補助動詞の正答率と誤用率を表にまとめると次の通りになる。

表 2 授受本動詞と補助動詞の文産出テストの正用・誤用率

項目	上位群（20名）		中位群（28名）		下位群（23名）	
	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
アゲル	82%	18%	73%	27%	78%	22%
～テアゲル	90%	10%	84%	16%	70%	30%
くれる	77%	23%	62%	38%	72%	28%
～テクレル	80%	20%	55%	45%	50%	50%
モラウ	87%	13%	80%	20%	72%	28%
～テモラウ	87.5%	12.5%	85%	15%	61.5%	38.5%
ゼロ <sup>4</sup>	27.5%	72.5%	35%	65%	13%	87%

上記の成績の分散分析を行った結果は次の通りである。

学習者の日本語のレベルと項目の間に有意な差がみられるかどうかを検討するために文産出テストの一人一人の各項目の平均得点を計算し、分散分析<sup>5</sup>を行った。分散分析は、「レベル」、「項目」と2つの要因で行った。なお、「A：レベル」は「上位群、中位群、下位群」の要因、「B：項目」は「アゲル、～テアゲル、クレル、～テクレル、モラウ、～テモラウ」の要因を表す。

表 3 分散分析表

source	SS	df	MS	F	p	
A: レベル	2.3216871	2	1.1608436	7.912	0.0008	****
error[S(A)]	9.9772774	68	0.1467247			
B: 項目	1.7905469	5	0.3581094	3.620	0.0033	***
AB	1.3013461	10	0.1301346	1.316	0.2204	
error[BS(A)]	33.6317288	340	0.0989168			

分散分析を行った結果、表 3 のようにレベルにおいて成績に主効果が認められた ( $p < .001$ )。要因 A の主効果における多重比較を行った結果、上位群は下位群より成績が良かった(上位群 > 下位群)。上位群は中位群よりも成績が良かった(上位群 > 中位群)。また、中位群は下位群より成績が良かった。このことからスリランカ人学習者の場合もレベルが上がるにつれて授受表現の習得が進むと言える。

- 141 -

と「～テクレル」の間に有意な差が見られた。「モラウ」>「～テクレル」だった。「～テクレル」と「～テモラウ」の間に有意な差が認められた。「～テモラウ」>「～テクレル」だった。しかし、「アゲル」と「モラウ」、そして、「アゲル」と「～テモラウ」の間に有意な差が見られなかった。また、「～テアゲル」と「～テモラウ」の間の差が有意ではなかった。このことからスリランカ人の場合、授受表現を「～テアゲル」>「アゲル」、「モラウ」、「～テモラウ」>「クレル」>「～テクレル」の順に習得していると言える。

表 4 授受表現のレベルと項目における平均及び標準偏差

項目	上位群 (N=20)		中位群 (N=28)		下位群 (N=23)	
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)
アゲル	0.82	0.29	0.73	0.34	0.78	0.29
～テアゲル	0.90	0.20	0.79	0.31	0.72	0.38
クレル	0.77	0.33	0.62	0.37	0.72	0.36
～テクレル	0.82	0.24	0.54	0.38	0.50	0.39
モラウ	0.87	0.27	0.80	0.28	0.72	0.29
～テモラウ	0.90	0.25	0.84	0.23	0.61	0.42

以上、文産出テストの結果、授受本動詞の場合、レベルにかかわらず、「クレル」表現に誤用が多く見られた。その要因として単純にシンハラ語では「クレル」に当たる表現がないからといえるが、「クレル」とするべきところを「アゲル」にする誤用が一番多かったことで、「クレル」だけではなく、「アゲル」の意味も理解していない可能性も考えられる。そして、授受補助動詞に関しても本動詞と同じく、「～テアゲル」と「～テモラウ」よりも「～テクレル」の正答率が低かった。その原因について考えると、野田他（2001）で指摘しているように、母語と目標言語の対応関係に関して「対応」<「統合」<「削除」<「導入」<「分化」の順に習得の難易度が上がることで、日本語の授受表現の場合、日本語の「アゲル」と「クレル」に対してシンハラ語では、“denawa”表現しかないため、スリランカ人シンハラ語話者にとって「クレル」系表現が「分化」であり、習得が一番困難であるといえる。日本語の授受補助動詞の場合、スリランカ人学習者にとって「～テモラウ」表現の習得が容易であった。その原因としてシンハラ語では日本語の「～テモラウ」表現に相当できる“wa/gannawa”表現がある、つまり、「～テモラウ」はスリランカ人学習者にとって「対応」であるためではないかと考えられる。このことから、スリランカ人学習者の授受表現の習得に母語の影響がかかわっていることが否定できないと考えられる。では、実際の場面で授受表現を使用する際もこのような傾向が期待できるのか。それを探るため被験者の中

から日本語能力試験 2 級以上のレベルの学習者 10 名を選び、ロールプレーテストを行った。

5.5 ロールプレーテストの結果

本調査では、「～テモラウ」を描出する場面を 3 つ設定し、スリランカ人シンハラ語話者の学習者 10 名を対象にロールプレーテストを行った。学習者の日本語のレベルは日本語能力試験 2 級以上を持つ事を条件とした。場面の内容は次の通りである。

場面① 駅で間違えて買ってしまった切符を取り替えてもらう。

場面② 友達にノートを貸してもらう。

場面③ 先輩にレポートの英語をチェックしてもらう。

表 5 授受補助動詞におけるロールプレーテストの結果

	～テアゲル	～テクレル	～テモラウ
場面①	0	6	4
場面②	0	10	0
場面③	1	7	2

表 5 で示しているようにスリランカ人日本語学習は上記の三つの場面において「～テモラウ」より「～テクレル」を好んで使用している傾向が見られた。この結果は文産出テストの結果と違う結果となった。文産出テストでは、「～テクレル」の誤用が「～テモラウ」より多かったのに対し、ロールプレーテストでは、「～テモラウ」の使用が「～テクレル」より少なかった。

6. 考察

以上をまとめると、スリランカ人日本語学習者の場合、筆記試験では誤用が一番多かった表現であったのにもかかわらず、実際の場面では「～テクレル」を「～テモラウ」よりも好んで使用していることが明になった。インタビューに協力していただいた学習者に再び確認したところを、その要因として Priyadarshani・浮田（2008）でも指摘されている日本語の「～テモラウ」に相当するシンハラ語の“－wa/gannawa”は場合によって強制的意味になることがあり、学習者は「～テモラウ」表現をできるだけ避け、その代わりに“－la/denawa”の意味をもつ「～テクレル」を使用したという答えだった。

7. 終わりに

本稿では、スリランカ人日本語学習者の誤用文に着目し、日本語とシンハラ語の授受表



現の類似点や相違点が学習者の習得にどのような影響を与えているのかを検討した。その結果、スリランカ人日本語学習者の場合、レベルが向上しても母語の干渉が習得過程にかなりの影響与えていることが明らかになった。しかし、本調査でテ使用した場面や問題数が非常に少なかったため日本語とシンハラ語の授受表現全体を明なしたとは言えない。そのため、これからも日本語とシンハラガの授受表現の意味用法をさらに詳しく検討したうえで場面や問題数を増やした研究が必要であると考え。

#### 注

- 1) 授受補助動詞における文産出テストの内容について詳しい説明は 5.2 を参照。
- 2) スリランカのケラニヤ大学現代言語学科では、学士課程一般(general degree course)で三つの科目の内二つの外国語を履修科目として選択できる。
- 3) SPOT とは筑波大学で開発された日本語能力を測定するテストで自然なスピードの音声テープを聴きながらテープと同じ文章が書かれた解答用紙の空欄にひらがな一文字を入れるテストである SPOT は、学習者の日本語能力を総合的に即敵出来るテストとして現在広く使用されている (Sasaki 2001)。本研究では、SPOT のヴァージョン A を使用した。
- 4) 本論で使用している「ゼロ」とは授受表現が必要ではない場面を意味する。
- 5) 本稿での統計処理において Excel と統計プログラム ANOVA4on the Web を使用した。

#### 参考文献

- 荒巻朋子(2003)「授受文形成能力と場面判断能力の関係―質問紙調査による授受表現の誤用分析から―」『日本語教育』117: 43-52.
- 大塚純子(1995)「中上級学習者の視点表現の発達について―立場志向分を中心に―」『言語文化と日本語教育』9: 281-292.
- 奥津敬一郎(1979)「日本語の授受動詞の構文―英語・朝鮮語と比較して―」『人文学報』132: 1-27 東京都立大学
- 奥津敬一郎(1984)「授受動詞文の構造―日本語・中国語対照研究の試み―」『金田一春彦博士古稀記念論文集 2』65-88 三省堂
- 久野暲(1978)『談話の文法』講談社
- 坂本・岡田久美(1996)「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア文学・語学編』61: 157-202.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 堀口純子 (1983)「授受表現に関する誤りの分析」『日本語教育』52: 91-103.
- 水谷信子(1984)「だれかがわたしの財布を取りました―事実志向と立場志向―」『日本語学』

